

原子炉実験所だより

目次

1. 平成4年度共同利用研究（追加申請）の提出期限について	1
2. 平成4年度ワークショップ、専門研究会の審査結果	1
3. 平成4年度臨界集合体実験装置共同利用研究の審査結果	3
4. KUR-B1実験孔の活用について	6
5. 英文報告書の提出について	7
6. 原子炉実験所運営委員会委員候補者の推薦及び原子炉 利用研究者グループ幹事の選挙について	10
7. 週休二日制の完全実施に伴う共同利用研究について	10
8. 共同利用研究員宿泊所使用料金の改定について	11
9. 大阪ニュークリアサイエンス協会賞の受賞について	11
10. 教官公募について	11
11. 審議員名簿	13
12. 運営委員名簿	14
13. 職員の異動	15
14. 委員会メモ（平成4年2月～平成4年4月）	16
編集後記	17

1. 平成4年度共同利用研究(追加申請)の提出期限について

平成4年度の共同利用研究は、すでに年度当初に公募採択しておりますが、特に希望のある場合は下半期だけの「通常採択」について追加申請を受付けております。申請書類の提出期限及び送付先は次のとおりとなっておりますので、十分ご留意願います。

提出期限：イ) 共同利用研究〔ロ〕を除く〕

平成4年6月12日(金)

ロ) 臨界集合体実験装置(附設中性子発生装置を含む。)

共同利用研究

平成4年7月31日(金)

送付先：郵便番号 590-04

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

共同利用掛

(封筒の表に「申請書在中」と朱記して下さい。)

なお郵送の場合は必ず「書留便」にして下さい。)

2. 平成4年度ワークショップ、専門研究会の審査結果

運営委員会において申請のあったワークショップ3件、専門研究会13件を審査の結果、ワークショップ、専門研究会ともに全件が採択されました。

平成4年度ワークショップ採択一覧

ワークショップ名	申請者	開催責任者	
		所外	所内
臨界集合体実験装置の改造	京大原子炉 助教授 神田啓治	東北大工 教授 平川直弘	神田 啓治
研究用原子炉の機能整備	京大原子炉 教授 西原英晃	名大工 教授 加藤敏郎	宇津呂雄彦
低温照射・制御照射装置の開発と応用	九大応力研 教授 蔵元英一	九大応力研 教授 蔵元英一	岡田 守民

(平成4年4月10日運営委員会)

平成4年度専門研究会採択一覧

研 究 会 名	申 請 者	開 催 責 任 者	
		所 外	所 内
不安定核ビームによる 核物理・核物性	京大原子炉 教授 岡野事行	東北大サイクロトロン 教授 藤岡 学	岡野事行 川瀬洋一
一貫した核燃料サイクル を目指す原子力研究	京大原子炉 教授 西原英晃	名大工 教授 仁科浩二郎	西原英晃
次世代燃料評価	九大工 教授 古屋廣高	九大工 教授 古屋廣高	玉井忠治
放射線を利用した生命 現象解明への展望	京大原子炉 助手 生島隆治	金沢大薬 助手 松永 司	生島隆治
次世代型原子炉の核特性	京大原子炉 助教授 代谷誠治	阪大工 助教授 竹田敏一	代谷誠治
核分裂の理工学	阪大理 教授 馬場 宏	阪大理 教授 馬場 宏	中込良広
研究炉等管理	京大原子炉 教授 藤田薫頭	近大原研 所長 柴田俊一	藤田薫頭
中性子捕捉療法用 ホウ素化合物	東北大理 教授 山本嘉則	東北大理 助手 根本尚夫	北岡祥伯 小林慎江
放射化分析	京大理 教授 西村 進	京大理 教授 西村 進	笹島和久
放射線誘起構造変化	京大原子炉 助教授 松山奉史	北大工 助教授 小笠原正明	松山奉史
放射性廃棄物管理	京大工 教授 東 邦夫	京大工 教授 東 邦夫	下浦一邦
ラドンの被ばく評価と リスク	近大理工 教授 本田嘉秀	秋田大医 教授 滝澤行雄	辻本 忠
複雑な系での励起・緩和 過程に関する基礎研究	滋賀医科大 教授 吉田不空雄	京大工 教授 宗像豊哲	田崎誠司

(平成4年4月10日運営委員会)

3. 平成4年度臨界集合体実験装置共同利用研究の審査結果

臨界集合体実験装置共同利用委員会において申請のあった10件について審査の結果、全件の採択となりました。

平成4年度臨界集合体実験装置共同利用採択一覧表

申 請 者 ・ 協 力 者			実 験 課 題	区 分
氏 名	所 属 ・ 職 名			
平川 直弘	東北大・工	教 授	箔放射化法による炉心中心 スペクトルの推定	共 同 通 常
岩崎 智彦	〃	助 手		
辻本 和文	〃	院 生		
吉岡 正博	〃	〃		
大久保 剛	〃	〃		
小林 圭二	原 子 炉	助 手		
代谷 誠治	〃	助教授		
相沢 乙彦	武工大・原研	教 授	スペクトル・シフター付き 炉心の反応率分布測定	共 同 通 常
竹田 敏一	阪 大・工	助教授		
山本 淳治	〃	助 手		
大屋 雅人	武工大・工	院 生		
石井 雅人	〃	〃		
苗村 昌嘉	阪 大・工	〃		
室谷 直弘	〃	〃		
代谷 誠治	原 子 炉	助教授		
宇根崎博信	〃	助 手		
森 千鶴夫	名 大・工	教 授	位置検出型中性子計数管の 特性試験とその応用の研究	共 同 通 常
瓜谷 章	〃	助 手		
柳田 勝男	〃	技 官		
松村 歩	〃	院 生		
安藤 彰浩	〃	〃		
木村 逸郎	京 大・工	教 授		
小林 圭二	原 子 炉	助 手		
市原 千博	〃	〃		
代谷 誠治	〃	助教授		

申 請 者 ・ 協 力 者			実 験 課 題	区 分
氏 名	所 属 ・ 職 名			
山根 義宏	名 大 ・ 工	助教授	Bennettの手法による熱中性子炉体系のBeff測定（3）	共 同 通 常
三澤 毅	”	助 手		
羽塚 平	”	院 生		
池野 勉	”	”		
重留 義明	”	”		
大竹 浩志	”	学 生		
代谷 誠治	原 子 炉	助教授		
小林 圭二	”	助 手		
三澤 毅	名 大 ・ 工	助 手	タングステン線による反応率分布の測定	共 同 通 常
吉岡 博貴	”	院 生		
豊嶋 謙介	”	”		
大竹 浩志	”	学 生		
岩崎 智彦	東北大 ・ 工	助 手		
須山 賢也	”	院 生		
辻本 和文	”	”		
代谷 誠治	原 子 炉	助教授		
小林 圭二	”	助 手		
木村 逸郎	京 大 ・ 工	教 授	トリウム転換ハイブリッド炉の基礎研究	共 同 通 常
神野 郁夫	”	助 手		
金澤 哲	”	技 官		
三河 巧	”	院 生		
林 脩平	立教大 ・ 原研	助教授		
山本 淳治	阪 大 ・ 工	助 手		
市原 千博	原 子 炉	助 手		
茶谷 浩	”	技 官		
小林 圭二	”	助 手		

申 請 者 ・ 協 力 者			実 験 課 題	区 分
氏 名	所 属 ・ 職 名			
小林 啓祐	京 大・工	助教授	結合炉を用いた実効遅発中性 子割合の測定	共 同 通 常
伊藤 洋	〃	院 生		
小野 良典	〃	〃		
長家 康展	〃	〃		
錦織 毅夫	阪 大・工	助 手		
高谷 浩樹	〃	院 生		
代谷 誠治	原 子 炉	助教授		
神野 郁夫	京 大・工	助 手	炉内高速中性子及びガンマ線 の測定と解析	共 同 通 常
木村 逸郎	〃	教 授		
金澤 哲	〃	技 官		
桜井 良憲	〃	院 生		
三河 巧	〃	〃		
景平 克志	〃	〃		
木村 純	〃	〃		
神田 啓治	原 子 炉	助教授		
代谷 誠治	〃	〃		
佐藤 孝司	〃	助 手		
竹田 敏一	阪 大・工	助教授	軸方向反射体を持つ V_m/V_f = 2.0 炉心の反応率分布測定 —天然ウランブランケット 付き炉心—	共 同 通 常
苗村 昌嘉	〃	院 生		
室谷 直弘	〃	〃		
相沢 乙彦	武工大・原研	教 授		
石井 雅人	武工大・工	院 生		
大屋 雅人	〃	〃		
代谷 誠治	原 子 炉	助教授		
宇根崎博信	〃	助 手		
山本 淳治	阪 大・工	助 手		

申請者・協力者		実験課題	区分
氏名	所属・職名		
工藤 和彦	九大・工 教授	H/U比の小さいトリウム (Th) 含有炉心の臨界実験	共同 通常
張 俊	” 院 生		
野田 秀史	” ”		
黒木 賢一	” ”		
小林 圭二	原子炉 助 手		
林 正俊	” ”		

(平成4年2月14日臨界集合体実験装置共同利用委員会)

4. KUR-B1実験孔の活用について

かねてより実験所におきましては、平成4年2月5日開催の「実験所将来計画短期研究会」(開催報告:実験所だよりNo.14参照)及び平成3年度「研究用原子炉の機能整備ワークショップ」(第1回～第3回:毎回開催記録を作成)等において報告・討議してきましたように、研究炉の高度利用と新しい利用研究領域の開拓をめざした活動を積極的にすすめることにしております。

この度、この方針に添った準備作業の1つとして、KUR-B1実験孔について、これを新しい利用分野あるいは新しい利用設備の設置に活用する計画のために、必要な準備実験や試験的利用等に開放することになりました。ついては、このような計画あるいは準備実験等の提案をお考えの方は、御関係の分野に近い実験所員とも適宜御相談の上、実験所の「KUR整備準備室」宛お申し出下さい。なお、平成4年度の「研究用原子炉の機能整備ワークショップ」においては、このような各御提案について詳細の検討と具体化への取組みを行うことも予定されていますので、その折はよろしく御協力をお願いします。

KUR整備準備室

5. 英文報告書の提出について

当実験所はいま、厳しい社会的状況のなかにあります。この局面を開くには、優れた将来計画を示し組織改革を進める必要があります。それとともに、実験所の研究活動の成果を広く世に伝えることにより、実験所の役割について理解を深め、支持を得る努力も重要かつ緊急を要する課題です。そのためには、共同利用研究のみならず所員自身の行う研究も含めて、当実験所の研究活動全体について年度毎の研究の成果あるいは経過をまとめて国際的に公表することは、極めて有意義なことと考えます。

従来、当実験所の研究活動報告としては、Annual Reports 及びテクニカルレポートを出版してきました。Annual Reports は英文の研究成果報告として毎年刊行していますが、これは一応完結した研究について自由投稿されたものを出版するものであり、当実験所で行われる毎年の研究をすべて網羅するものではありません。一方、テクニカルレポートは、主として研究会、特性試験、管理等の報告であり、研究の成果あるいは経過の報告を目的としたものではありません。また、共同利用研究については共同利用研究報告書を毎年度提出して戴き、これをまとめてテクニカルレポートとして出版していますが、これは和文報告のため国際性に欠ける面があり、かつ、これには、所員自身の行う研究が含まれておりません。

そこで、平成4年度より、共同利用研究のみならず所員自身の行う研究も含めて、当実験所で行われた研究活動全体を網羅する形で、毎年度の研究の成果あるいは経過を別紙の要領で英文報告書として提出して戴き、それをまとめてProgress Reports として刊行したいと考ます。共同利用研究については、平成5年度より和文の共同利用研究報告書を廃し英文報告書に一本化することも考えています。すでに進行中あるいは募集済みの平成3、4年度の共同利用研究については、共同利用者には大変ご面倒ですが、従来どおりの和文の共同利用報告書に加えて英文報告書も提出して戴くようお願い致します。

実験所の状況と、この英文報告書の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願い致します。

(別 紙)

英文報告書要領(平成3年度分)

(1) 報告書の提出

平成3年度中に実施された研究についての英文報告書を、平成4年10月末日までに下記宛に提出して下さい(郵送可)。

〒590-04 大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所 総務課 共同利用掛

(TEL: 0724-52-0901 内線2151,2152)

(2) 原稿枚数

研究の成果あるいは経過を年度毎にまとめて、A4判の用紙を使用し原則として2頁の英文報

告書を作成して下さい。

(3) 原稿のフォーマット

原稿は、そのまま原寸大でオフセット印刷しますので、著者の責任においてタイプ打ち又はワープロで別に定める要領で清書して下さい。提出された原稿は査読されませんが、所定の様式から著しく異なるものについては、再提出をお願いすることがあります。

(4) 英文報告書は、原子炉実験所の Progress Reports として、毎年、原子炉実験所出版委員会から刊行されます。

Progress report の原稿作成要領

1. 原稿はそのままオフセット印刷（原寸大）に回しますので、camera ready の状態で提出して下さい。
2. A4 タイプ用紙2枚（裏は白紙）に納めて下さい。
3. オリジナルの原稿と、その乾式コピー1セットを提出して下さい。不鮮明な原稿は受け付けません。
4. 各用紙の上25ミリ、下30ミリ、左30ミリ、右25ミリの余白を空けて下さい。
5. 言語は英語を使って下さい。
6. 文字間隔については、横1インチ当り12文字（1行当り約70文字相当）あるいはプロポーショナル。
行間隔については、縦1インチ当り4行（1ページ約38行相当）で、作成して下さい。
7. 題目：左寄せで、前置詞、接統詞の他は頭だけを大文字にして書いて下さい。
2行以上にわたっても構いません。
8. 著者名：題目の下1行あけて左寄せで、例えば、
M. S. Gorbachov, B. El'tsin and G. Bush
のように書いて下さい。所属が複数にわたる場合は、名前の右肩に番号を付けて区別できるようにして下さい。
9. 所属：著者名の下1行あけて左寄せで書いて下さい。略名などの場合は全部大文字、その他は頭だけ大文字に下さい。所属が複数にわたる場合は、対応する番号を左肩に付けて下さい。
10. アブストラクト、キーワードは不要です。
11. 本文は所属欄の下、1行あけて始めます。この場合、各パラグラフの始めに5文字分のスペースを入れて下さい。
12. ページ番号は入れないで下さい。
13. 共同利用研究の場合は、原稿末尾に採択番号を鉛筆で書いて下さい。
14. 図、表、参考文献の引用の仕方などに、特に書式制限は設けません。

25mm余白

New Particles violating the General Theory of Relativity

1行あけ

Y. Haraguchi, G. Yamada, S. Hara, K. Kobayashi¹, Y. Yuasa², H. Tanaka¹,
Y. Kimura³ and T. Horiuchi

25mm余白

Research Reactor Institute, Kyoto University, ¹Department of Nuclear Engineering, Nagoya University, ²Department of Physics, Tokyo Institute of Technology, ³Faculty of Science, Hiroshima University

スペース

5つ

30mm余白

The purpose of the JAERI-ISOL project is to investigate the structure of short-lived nuclei which are prepared by means of an isotope separator coupled to the tandem accelerator in JAERI. So far, work at JAERI-ISOL has concentrated on the electron- and gamma-spectroscopy of neutron deficient nuclei in the A=120-130 mass region, so that level energies and γ -transition properties in these nuclei have been investigated. It is interesting to supplement this investigation with measurements of nuclear moments derived from optical hyperfine structure (hfs). Thus we installed a collinear laser-ion-beam spectroscopy system at JAERI-ISOL. The purpose of this system is to measure hfs in radioactive isotopes with sub-Doppler resolution.¹⁾ We report here on results of tests performed by using stable isotope ¹⁴¹Pr.

The experimental setup is shown in Fig.1. A cw dye laser with wavemeter (Coherent 699-29) was pumped with an Ar-ion laser (Coherent INU-100) and controlled by a personal computer. As a dye, Rhodamine 6G was used. The wavemeter was used to determine the wavelength of the laser light. The laser light was modulated by an absorber and the intensity was measured by a photodiode. The gas pressure was maintained at 10⁻⁴ Torr for our needs. More important is the fact that the mass-separated yield is estimated to be 10⁴ ions/s in on-line experiments. Thus reduction of the backgrounds and improvement of the overall efficiency are necessary. We are now attempting to improve collection efficiency of the fluorescence photons and to increase population of the metastable states.

page 1

REFERENCE

- 1) S.L.Kaufman: Opt. Commun. 17(1976)309.
- 2) H.Iimura, Y.Nakahara, S.Ichikawa, K.Kotani, M.Wakasugi and T.Horiguchi, J.Phys.Sci.Jpn. 59(1990)4208.

page 2

30mm余白

(鉛筆書き)

共同利用選択番号

6. 原子炉実験所運営委員会候補者の推薦および

原子炉利用研究者グループ幹事の選挙について

このたび所長より、平成4年度9月末日をもって任期満了となる運営委員会委員（以下「運営委員」という。）6名の後任について、原子炉利用研究者グループに対し、推薦の依頼がありました。

つきましては、慣例に従い、原子炉利用研究者グループ会員の選挙により運営委員候補者を決定し、推薦することとなりました。

また、同時に原子炉利用研究者グループ幹事（所外8名、所内8名、計16名）の選挙も行います。

なお、「投票用紙」等は原子炉利用研究者グループの全会員に郵送されることになっています。投票に際しましては、「投票用紙」とともに郵送されました「投票上の注意」をよくお読み頂き、所定の投票用紙に候補者名をお書きの上、「投票用封筒」に封入し、さらに「郵送用封筒」に封入して、下記の期限内に、原子炉利用研究者グループ事務局宛にお送り下さい。

投票の送り先：大阪府泉南郡熊取町 郵便番号590-04

京都大学原子炉実験所 原子炉利用研究者グループ事務局

投票期限：平成4年6月26日（金） 正午まで

6月26日（金）午後4時より実験所において開票します。

（原子炉利用研究者グループ幹事会）

7. 週休二日制の完全実施に伴う共同利用研究について

国家公務員の週休二日制が、平成4年5月1日から完全実施されることになりました。

本実験所におきましても、土曜閉庁方式で対応し、基本的には当該日における業務を休止いたしますので、今後の共同利用研究にあたりましては、この趣旨を充分ご理解頂き、ご協力賜りますようお願いいたします。

なお、止むを得ない理由により、休日に「非密封RIは取り扱わない」という限定条件の範囲内で原子炉棟における実験等を行う必要があり、例外的措置として実施されたい場合には、特に所内連絡者と事前に充分な連絡・協議を行って頂くようお願いいたします。

また、従前、金曜日の午後5時まで稼働しておりました研究炉の運転は、今後、金曜日の午後4時に停止いたします。従いまして照射後の処理・片付け及び照射後試料の持出し等、実験所退所に必要な手続きは、午後5時までに完了するよう、当日は十分な時間的余裕を持って実施していただくようお願いいたします。

おって、今まで中央管理室で行っておりましたRI持出し許可証の発行手続きは、ホットラボラトリーの保健物理室で行うことになりましたので、ご注意願います。

8. 共同利用研究員宿泊所使用料金の改定について

この度、宿泊所宿泊料金の改定（改定理由、土地建物台帳価格変更および光熱水料の料金改定並びに人件費の値上がり）に伴い、平成4年5月1日から、使用料金を1人1泊につき780円から850円に改定いたしましたので、ご了承願います。

9. 大阪ニュークリアサイエンス協会賞の受賞について

このたび、原子炉研究部門岡田守民助手に大阪ニュークリアサイエンス協会賞が授与されることになりました。授賞式は、5月中旬、NTT大阪内本町会館で行われる予定です。

10. 教官公募について

現在下記のように教官の公募を行っています。

原子炉実験所は、原子炉による実験及びこれに関連する研究を行うことを目的とした全国大学等の共同利用研究所です。当所では、先般、従来の量的拡大を目指した2号炉計画を撤回し、今後は、質的向上を重視して研究炉KURのより高度な利用を中心として研究を行おうとしています。そのため、研究組織の再編成を行い、より活力のある研究所として生まれ変わるよう努力しています。

今回の公募は、その一環として、それぞれの分野において共同利用を含めた研究の中心となる人材を募るものです。新しい研究設備の整備・充実については、当所としても鋭意努力を重ねて参りますが、予測される多くの困難を率先して打開していく意欲ある研究者を募ります。

公募締切りは教授いずれも平成4年5月29日（金）午後5時（必着）、助手は平成4年5月25日（月）午後5時（必着）です。

詳しくは原子炉実験所総務課庶務掛（TEL. 0724-52-0901、内線2111）までご照会下さい。

記

区 分	職名及び人数	職 務 の 内 容
A	教授 1名	放射性核種の製造と分析、及び核反応の及ぼす化学的效果に関連する研究とその指導、並びにホットラボラトリーにおける設備機器の保守管理についての統括的指導。更に超ウラン元素の消滅処理に関連する核特性の評価、超ウラン元素の化学的挙動に関する研究計画についても意欲的に取り組むこと。
B	教授 1名	粒子線の生物的效果や放射線に対する生体の高次の制御機構など粒子線に関する生物・医学的基礎研究とその指導、並びにこれらに関連する装置、設備の開発と利用。
C	教授 1名	原子炉等を用いた照射技術の高度化による材料照射効果の基礎研究とその指導、並びにこれらに関連する研究設備の開発と利用。即ち、広範な固体材料に関して、照射効果研究を自ら推進しつつ、必要な照射技術を開発し運用すること。
附属原子炉 医療基礎研究施設	助手 1名	原子炉中性子を含む放射線による悪性腫瘍の治療と診断に関する基礎的臨床的研究。

11. 審議員名簿

平成4年4月1日現在

東京大学教授	(工 学 部)	石 樽 顯 吉
東京工業大学教授	(原子炉工学研究所)	岡 本 眞 實
名古屋大学教授	(工 学 部)	仁 科 浩 二 郎
大阪大学教授	(医学部バイオメディカル 教育研究センター)	井 上 俊 彦
同	(工 学 部)	住 田 健 二
同	(基 礎 工 学 部)	葛 西 道 生
同	(産業科学研究所)	新 原 皓 一
九州大学教授	(工 学 部)	的 場 優
京都大学教授	(医 学 部)	阿 部 光 幸
同	(工 学 部)	伊 藤 靖 彦
同	(農 学 部)	松 野 隆 一
同	(化 学 研 究 所)	井 上 信
同	(原子炉実験所)	西 原 英 晃
同	(同)	澁 谷 巖
同	(同)	藤 田 薫 顯
同	(同)	岡 野 事 行
同	(同)	山 岡 仁 史
同	(同)	宇 津 呂 雄 彦
同	(同)	前 田 豊
同	(同)	小 野 公 二
同	(原子炉実験所併任)	桐 谷 道 雄
同	(同)	佐々木 正 夫
京都大学助教授	(原子炉実験所)	西 牧 研 壮
同	(同)	菊 池 忠 壽
同	(同)	玉 井 忠 治

12. 運 営 委 員 名 簿

平成3年10月1日現在

東北大学	助教授	(理学部附属泡箱 写真解析施設)	山 口 晃
名古屋大学	同	(工 学 部)	中 島 敬 行
大阪大学	同	(基 礎 工 学 部)	那 須 三 郎
広島大学	教 授	(原爆放射能医学 研 究 所)	丹 羽 太 貫
同	助教授	(工 学 部)	竹 味 弘 勝
九州大学	教 授	(理 学 部)	阿知波 紀 郎
東京理科大学	同	(薬 学 部)	久保寺 昭 子
京都薬科大学	同	(同)	桜 井 弘
岡山理科大学	助教授	(理 学 部)	関 達 也
京都大学	教 授	(放射性同位元素 総合センター)	栗 原 紀 夫
同	同	(放射線生物研究 センター)	佐々木 正 夫
同	助教授	(工 学 部)	小 林 啓 祐
同	同	(同)	森 山 裕 丈
同	同	(化学研究所附属原 子核科学研究施設)	松 木 征 史
同	事務局長		上 野 保 之
同	教 授	(原子炉実験所)	澁 谷 巖
同	同	(同)	藤 田 薫 顕
同	同	(同)	山 岡 仁 史
同	同	(同)	宇津呂 雄 彦
同	同	(同)	前 田 豊
同	助教授	(同)	玉 井 忠 治
同	同	(同)	下 浦 一 邦
同	同	(同)	辻 本 忠
同	同	(同)	長 谷 博 友
同	同	(同)	三 島 嘉一郎
同	同	(同)	松 山 奉 史
同	同	(同)	代 谷 誠 治

13. 職員の異動

1. 採用

平成4年3月16日付け	低速中性子物理学研究部門	助手	川口 昭夫
平成4年4月1日付け	放射線物性研究部門	助手	瀬戸 誠

2. 退職

平成4年3月31日限り	原子炉設備関係研究部門 (停年退職)	教授	岡本 朴
平成4年3月31日限り	放射線管理関係研究部門 (停年退職)	教授	松村 隆
平成4年3月31日付け	経理課用度掛 (定年退職)	文部事務官	田中 辰己

3. 昇任

平成4年4月1日付け	技術室 (北海道大学農学部附属演習林助手へ)	文部技官	野田 真人
平成4年4月1日付け	総務課長 (庶務部庶務課課長補佐から)		磯田 潔
平成4年4月1日付け	総務課共同利用掛長 (工学部総務課人事掛主任から)		麻田 茂
平成4年4月1日付け	経理課工営掛主任 (同課工営掛員から)		河内 正文
平成4年4月1日付け	経理課機械掛主任 (同課機械掛員から)		石田 省三

4. 配置換

平成4年4月1日付け	総務課長 (基礎物理学研究所事務長へ)		櫻井 功
平成4年4月1日付け	総務課庶務掛長 (総務課共同利用掛長から)		山根 大和
平成4年4月1日付け	総務課庶務掛長 (原子エネルギー研究所庶務掛長へ)		小山 修身

平成4年4月1日付け	経理課経理掛長 (経理課用度掛長から)	あさ だ つとむ 浅 田 勉
平成4年4月1日付け	経理課経理掛長 (木質科学研究所会計掛長へ)	み せ まなぶ 三 宅 学
平成4年4月1日付け	経理課用度掛長 (環境保全センター事務掛長から)	すが はら まさかず 菅 原 政 和

5. 併 任

平成4年4月1日付け	原子炉医療基礎研究施設長	こ の こう じ 小 野 公 二
------------	--------------	---------------------

14. 委員会メモ（平成4年2月～平成4年4月）

平成4年

2月7日	臨時協議委員会
14日	第76回臨界集合体実験装置共同利用委員会
21日	審議会・協議委員会
28日	平成3年度第9回原子炉安全委員会
3月18日	平成3年度第4回保健物理委員会
19日	審議会・協議委員会
25日	平成3年度第10回原子炉安全委員会
4月10日	第146回運営委員会
17日	審議会・協議委員会
24日	平成4年度第1回原子炉安全委員会

編集後記

桜の季節も終り、この原稿を書いている今、窓外の若葉が目にしみる。朝早くの原子炉では、いろいろな野鳥がその歌声を楽しませてくれる。シジュウカラ、ホオジロ、キジ、エナガ、コジュケイなど野鳥にはあまり親しくない人達でも名前だけは知っているような鳥達が四季折々の声を聞かせてくれる。時には、最近都会地ではめっきり少なくなったカワセミやキセキレイなども姿を見せる。足元だけを見ていると、つつい周りの世界の豊かさに気がつかないものである。原子炉実験所はこの30年近く頑張って来たけれども、ここいらで皆で背筋を伸し、周辺をゆっくりながめることも必要ではないかと思う。あり方検討委の一応の結論が出て、実験所の将来のかじ取りは、実験所の所員と共同利用研究者を中心とする研究者集団がその役割を担うことに結局はなった。ここ数年は、宿題に追いまわられていた感じのある実験所ではあったけれども、良く云えばゆとり、悪く云えばのんびりさを感じる今日此頃である。しかしゆとりがあつてこそ先も見えるというものである。このようなゆとりが創造の豊かさを生むことを祈るや切である。